人間的心理――「アルジャーノンに花束を」――

伊　藤　美　鈴

知能の増大と壊滅にまつわる悲劇「アルジャーノンに花束を」は、誰の人生にも起こることを微速度撮影フィルムの早回しで見せてくれたものではないかと思う。

生まれたばかりの人間は、誰でも、無垢で無防備な赤ん坊である。途中で事故のない限りは、子供になり、おとなになり、年を取り、そして次第には衰える。いずれにしろ、やがては必ず死んでいくのである。

「けえかほおこく」のはじめの頃、チャーリイ・ゴードンはあどけない幼児そのものである。後半は、まさに老衰だ。アルツハイマー病であると診断されてしまった人ならば、まず間違いなく、共感せずにいられないだろう恐怖とせつなさを描いている。

誰にでも起こることだからといって、決して納得がいくものではない。我慢できるものではない。自分は死にたくないし、愛するひとにも死んで欲しくない。できることならば、年齢的な衰えにも抵抗したい。今の自分にできることが楽にできなくなってしまう日が・・・・・・あるいは、まったくできなくなってしまう日が、遠からず来るなんて、認めたくはない。

ひとは身体的な問題ばかりではなく、精神もまた若くあることを望む。ＴＶや雑誌をみ、ベストセラーを買い、流行りの服を装い、新人歌手のはやりの歌をいち早く憶えたり・・・・・・。どうにもたまらなくなった時には、大酒を飲んで我れを忘れようとしたり、又は宗教に救いを求めたりもする。

昨日できたものよりは、今できたばかりのもののほうが。今あるものよりは、明日できるもののほうが。いつでも、間違いなくよくなっている。いわば、価値が高いのである。

もちろん、ひとは思い出も大切にする。アルバムを眺め、ビデオを撮りまくる。自分の匂いの染みついている、何かに時々ひたったりもする。

しかし、なにもかもみな、いつかは消えてしまうもの、忘れられてしまうものだ。油断するとすぐにも失われてしまいそうだからこそ、そっと気を付けて大事にしているのだと思う。いつまでも変わらないものなんて、どこにもない。そんなことは、わかりきっていることなのだけれど・・・。

“ほんとうは、いつまでも元気でいたい。そして、自分は永遠不変であって欲しい。”

（指導教員　中村　敦志）